

箴言

Liber Proverbiorum

2009年6月1日、観光教育に関する学長・学部長等と観光庁との懇談会において、原忠之氏（セントラルフロリダ大学）による「海外の観光ホスピタリティ系大学の教育内容について」と題する講演が行われた。

そこで、原氏は、エイブラハム・ピザムによる観光ホスピタリティ分野における研究手法の変遷に関する報告（Abraham Pizam, presentation 2008）を根拠に、「学会での個人・大学の名声は研究でのみ確立」と喝破した。

典拠となったピザムによるこの報告は、2015年に論文として学会誌に掲載された。（Manuel Antonio Rivera and Abraham Pizam, *Advances in hospitality research: “from Rodney Dangerfield to Aretha Franklin”*, *International Journal of Contemporary Hospitality Management*, 27-3, 2015, pp.362-378）その内容は以下の通りである。

第1段階の1930～1950年代は、元実務家によるケーススタディーの時代であり、分析対象は単一であった。これをピザムは Story Tellers の時代とよぶ。（p.363-364）

Profilers の時代と名付けた第2段階（1950～1970年代）には、実務家出身者に加えて、アカデミックなバックグラウンドをもった研究者が登場し、単一のケーススタディーに留まらず、複数の事例をも分析対象とするに至ったが、その研究成果は一般化・理論化の域には達していない。（p.364-365）

アカデミックで専門的な研究者による実証研究が実現し、かつマーケティングや定量分析による手法が導入されたのが、1970年代～2005年に至る第3段階である。これを Copy Cats の時代とよんだのは、独創的な理論が構築されるには至ってないことによる。とはいえ、この段階で初めて、理論化、一般化が進んだ。（p.365-366）

第4段階（2000年以降）には、大学院レベルにおいてホスピタリティ・マネジメントについて高度な訓練を受けたアカデミックな研究者があらわれる。Copy Cats と5年間の重複を含むこの段階を Innovators と呼ぶ。重回帰分析が手法として用いられ、独創的な理論構築がなされて現在に至っている。（p.366-367）

ピザムは、我が国の学術誌『観光文化』の巻頭言において「なぜ、日本の学者は世界のホスピタリティ・観光経営英文査読付き学術誌にほとんど出版がないのか？」と題し、「この分野の日本の研究者の大多数は第1段階ないし第2段階にある印象をもつ」と語った。（Abraham Pizam, *Why Japanese Academics Publish Scantly in Hospitality & Tourism Management Journals?* 『観光文化』221号、2014年）

アメリカや（日本以外の）アジアにおける観光ホスピタリティ研究の主流は、精緻な統計分析に依拠している。一方、ヨーロッパの研究者による定性的な優れた論文があることも、私は承知している。学問のグローバル化を目指すために、必ずしも定量志向をする必要性はないと思う。

だが、我が国における観光ホスピタリティ分野の研究論文には、学問的な一般化を怠っているものが多数見受けられるのも事実である。その理由のひとつは、先行研究のなかに自己の研究を位置づけていないことによる。自分の研究には先行研究がないと主張するむきもあるかもしれない。確かに、日本にはないかもしれない。しかし、類似の視角を有する先行研究は、たいていの場合、英文のアブストラクトを渉獵することによって発見できる。

単なるケーススタディーを提示して、一般化・抽象化の視点を欠いた研究では、ピザムに、第1段階、第2段階の論文といわれても、反論の余地はなからう。

山田 徹 雄
（跡見学園女子大学学長・教授）